

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- 2年目を迎えたFD活動
「変化」と「創造」を求めて
- 平成17年度FD活動実施計画
- 学部長および学科主任等のFD活動
への抱負・意見・提案
- 駒澤大学FD推進委員会委員名簿
- 駒澤大学FD推進委員会の今後の活
動予定

2年目を迎えたFD活動

「変化」と「創造」を求めて

FD推進委員会小委員会委員長

文学部教授 小野浩一

平成16年4月のFD推進委員会の立ち上げとともに始動した駒澤大学のFDへの取り組みは、今年2年目を迎えた。初年度であった昨年は、まず、「動き出すこと」を主眼に、「学生による授業アンケート」の実施を核として、これから始まる駒澤大学のFD活動をどのように展開していくべきか、その方向性と可能性を探った。小委員会で学習と議論を重ね、次のような今後の計画の大綱をまとめた。それらは、1) 教員の授業スキル向上および授業改善のためのサポート体制の整備、2) 学生の受講スキル向上のための施策、3) 授業改善へ向けての具体的方策、4) 教職員のFD意識向上のための施策、5) 授業改善のための環境整備、など多方面にわたっている。昨年度は、これらの計画の具体的実現として、7月と11月、2回の「学生による授業アンケート」、教員のための研修会(講演とワークショップ)、「FDニューズレター」の発行、などを実施することができた。

2年目以降のFD活動の主要な課題はFD活動のさらなる拡大と浸透を計りつつ、それらをいかに日常化させていくかということであろう。FDは改善の目標値を定め、それが達成されたら終了というものではない。また、教員だけの問題でもない。なぜならばFDが究極的に求めるものは、教育と研究という場に集う学生と教員と職員がそれぞれに「変化」と「創造」を求める営みそのものに通じるからである。

教育と研究の場は、また、さまざまな価値や思考が交錯する場でもある。どのようなFD活動が望ましいのか、それぞれの活動内容を具体化する段になるとそういった価値や思考がぶつかることも当然出てくる。FD活動に画一的な正解というものはないだろうから、それぞれの構成員が試行錯誤を重ねながら、よりよい方向を模索することが、各自の「変化」と「創造」のプロセスにつながっていけばいいのだと思う。

授業アンケート実施

前期終了科目対象

実施期間

7月1日(金)~7月7日(木)

平成17年度FD活動実施計画

- 1 「学生による授業アンケート」実施
- 2 「FD NEWSLETTER」発行
- 3 外部講師によるFD研修会
- 4 公開授業をトライアルとして実施
- 5 学内教育支援システム(e-learning、KOMSY)講習会
- 6 小委員会とFD推進部会の合同会議の開催
- 7 授業アンケート結果の公表

学部長および学科主任等のFD活動への 抱負・意見・提案

今回は、各学部等の学部長、学科主任の先生方にFDについての関心や意見を伺いました。これまでの取り組みをさらに発展させるためのFDについての活発な討論のきっかけになることと期待します。

仏教学部

仏教学部長 池田 練太郎教授

駒澤大学のFDの中心は授業の改善であり、その柱は学生による授業アンケートである。開始して1年ではあるが、良く言えば、これは教員に相当の意識改革をもたらした。しかし、このことはあくまで教育面のみに限定される。FDは、広くは研究面にも及ぶものである。一定の緊張感が必要だが、教員の意識が学生の評価によって管理されるようでは真のFDの推進とは言えない。高度な学問、最先端の研究成果を提供することも大学の大きな使命である。そして、研究活動には精神的にも物質的にもゆとりのある環境が欠かせない。本学のFDは、教育と研究の両面をバランス良く達成したものであってほしい。

禅学科主任 石井 清純教授

FDのこと

私は、講義を担当するようになって以来ずっと、受講生に講義内容や方法の問題点を指摘してもらう機会を設けていた。それゆえ、本学における授業アンケートの導入は、個人的には、問題なく受け入れられるものであった。だが、今年の私の例だけに限って言えば、そこに若干の問題を感じたのも事実である。それは、「評価する側」に立たされた学生たちに、アンケートの意義に対する意識が全く欠落しているように見えたことである。今後、この制度を授業や研究の有意義な進展に役立てられるようにするためには、評価する者に対し、この制度の役割・意義を浸透せしめることが不可欠であるように思われる。

仏教学科主任 長谷部 八朗教授

知られるように、エデュケーションの原意は“引き出す”こととされる。何を引き出すかは種々の議論があるが、学ぶ側の興味・関心をどれだけ触発しえたかが授業成果を左右する公分母の要件であるのは、論をまたない。しかし、マスプロ化された大学の授業では、その手応えを容易に実感できないのが現実である。「学生による授業評価」が形式的なスコア化に終わらず、教師のねらいに対する学生の反応を知るための積極的な場となることを望みたい。それには、教師自身が問いたい項目も含めたクエスチョネア作りが求められよう。評価が“今の終わり”に留まらず、“次への始まり”となることを期待したい。

文学部

文学部長 高木 正博教授

駒澤大学でもFDの取り組みが軌道に乗ってきたようである。これまでも授業のあり方については絶えず試行してきたつもりだが、昨年「学生による授業アンケート」が実施され、評価を受けてみると、改善すべきと気になっていた点は、や

はり学生にとってもわかりづらい点であった。また、教員が学生に対する授業姿勢も、それなりに評価されるということも認識できた。授業内容については教員・学生間に誤解もあるわけで、これは、授業時間をとおしてきめ細かく伝えるしかないな...、と実感した。いずれにしろ、これまでどちらかというと一方的になりがちだった授業形態を見直すよい機会になった。今後とも改善を加えて、よい点を伸ばす方向で発展させることが必要であると痛感している。

国文学科主任 松井 健児教授

昨年度の授業アンケートの学生コメントに、他の授業担当者への意見と思われる内容がありました。総合企画室へ照会したところ、集計については外部業者に委託しており、業者の返答も、間違いではないとのことでした。想定される授業担当者のアンケートの確認をお願いしたところ、事務担当ではアンケート内容は見られないとのこと。逆に受講生の書き間違いではないかということになり、学生への電話確認をするなど、錯綜することとなりました。結局、業者の過誤による他の先生へのコメントと判明。個人情報の混入ということになります。業者の対応や、その作業照査も検討課題かと思われました。

英米文学科主任 東 雄一郎教授

時代の波は否応なくすべてを洗い流す。流されまいと努めて何かを保ち得たとしても文脈はもはや過去のそれと同じではない。保つに値すると考える何かを意義あらしめ続けるためには文脈を直視し、歩みをともし、応用を効かせ、常に問い直しを試みるしかない。FD問題にも言えそうである。

授業アンケートは文脈を直視し理解するには格好のものと言える。自分の授業の評価と正面から向き合い改善のヒントを探す。授業の一つ一つが「教員と学生が協力して知的生産を行う学びの場」と言えるが、その実現にアンケートは大きな一翼となりうるであろうし、そうなるべく努力すべきであろう。

地理学科主任 櫻井 明久教授

地理学科における授業改善の工夫

地理学教室では、伝統的に学科事務室で、昼食を取りながら、また雑談しながら、授業改善のための情報交換が盛んだ。評価が学生に早く伝わり、反省させ、努力の方法を考えさせるという道も学習効果を高める一つの工夫であり、システムとしての授業改善策であろう。何人かの先生は、中間試験、レポート評価結果を各自に申告させた「ニックネーム」の名の下に掲示・公表することでこれを行っている。また、レポートにコメントを付し、早期に返却し、修正を求める形で試みるものもある。様々な方策が、可能な範囲で試みられている。

歴史学科主任 久保田 昌希教授

自身への戸惑いと「期待」

受講生が私の授業について何をどう感じているか。それを受けて自身がどのように考えるか。本当は避けて通りたいが、一方では強い関心もある。自身の授業だからであることは当然であろう。結果は「良かった」に尽きる。受講生の意見が「良かった」からではない。率直な意見にふれることで自身の気づかなかった所に気づいたという、当たり前のことが「良かった」。ただし、意見を聞いて譲れるところもあるが、譲れないところもある。言うまでもないが授業は双方の関係で成立する。最初の「戸惑い」は消えた。これからは、今後の励みとして自身に対して、ささやかに「期待」したい。

社会学科主任 小畑 和教授

FDについて

高等教育の改革の必要性が叫ばれ、平成11年には教育内容や方法について、それを高めるための組織的な研修等の実施に努めることが義務化された。いわゆるファカルティ・ディベロップメント(FD)の努力義務化である。

教員自身が自己の授業能力を向上させる努力をするのは教員として当然であり、FDのある無しにかかわらず授業研究は何時の時代も行われてきた。

しかしながら、学生が学習意欲をかきたてるには学習環境と無縁ではない。教場が溢れるばかりに何百人もの受講生が履修する講義では、いかに教員の資質の向上や授業方法の工夫がなされても教育の効果は上がり、いずれ学生は授業を休むようになる。たまに出てきても内容が分からず苦痛を堪えて座っているだけになる。

本学の教場では机がびっしりと詰まり、前は教卓にふっ付くほどに、後ろは壁にふっ付いて万一の事故には逃げる通路もないほどに詰まっている。まず大学がやらねばならぬことはFDよりも教場内の机や椅子を減らすことである。少なくとも前と後ろには通路を確保しなければならない。

学生は大学教育の主体であり、一面では消費者としてその権利を持つ。つまり適正な環境で授業を受ける権利がある。その上でのFDでなければならない。

心理学科主任 間島 英俊教授

2004年12月12日の朝日新聞朝刊(8面)に、「大学G-メン」始動との見出しで、大学・学部に対する第三者機関(国の認証を受けた評価機関)による点検・評価の義務付けの記事が載っていた。今後2010年までには既存の全大学が一度はその評価を受けるとのことである。承知のように我が大学も1995年以来、学内での自己点検・自己評価を2度行ってきた。そして昨年度から学生による授業評価が開始されている。いずれにせよ内・外の評価というものは相対的なものであり、そして諸刃の剣を含んでいることだけは否めない感もするが、学生・教員間の相互効果を促し、学問的自立を高めるのであればそれはそれで享受すべきであろう。

文化学教室主任 池上 良正教授

私の学生時代、大学教師はまだ「変人」の代名詞だった。すべての講義を漫談で通す名物教授もいたし、何を話しているのかさっぱりわからない授業をする先生の著書を読み、その明晰な論理と名文に感動した体験もある。昔は良かった、と言うつもりはない。ただ、人を鍛え育てるのは強い個性であること、大学の個性とは教員の個性でもあることは、忘れ

ないでほしい。最近では「文科省のお達し」という名のもとに、つまらぬ画一化に帰着するような「改革」が多すぎる。そもそも「わかりやすい授業」を言うなら、「FD推進」などという、よそよそしくて「わかりにくい」名称こそ、何とかならないものか。

自然科学教室主任 清水 善和教授

FDについて

横文字を略したFDは今一つ内容がはっきりしないが、「授業改善のための各種取り組み」と理解している。本大学には多様な人材がいるにもかかわらず、従来FDの観点から生かされてこなかったのは残念である。当教室では専門の異なる6名の教員が自然科学の多様な科目を担当している。FDのための特別な取り組みではないが、会議や昼休みなどに集まった際には様々な分野の話題に花が咲き、授業の参考になることも多い。また、「自然誌」と「総合II(自然観察入門)」は複数の教員が輪講形式で行う科目なので、全体の内容が統一性をもつように事前の調整を行っている。今後は非常勤講師の先生を交えての勉強会などもやってみたい。

教職課程主任 遠藤 司教授

大学授業改善のために

大学授業の改善の試みをより確かなものにするために、授業を通してどのような人材を育成するべきかという意識を教員がもつことは、極めて重要なことである。「高い専門性を有する教養人」、「世界に通用する国際人」等、様々な考え方があろう。それらの視点から学生の現状を見たとき、今、何を学ぶべきであるか、また、互いにどのような学びの方法をとるべきであるかを考えることこそが、授業改善の根底になければならない。何のためのFDなのかという「問い」を共有した上で、教員各人の意識の深まりに基づく授業改善の試みを重ねていくべきであり、自分自身もそのようにしていきたいと考えている。

経済学部

経済学部長 小杉 修二教授

FDの目標について

学園通信に本学で初めての学生授業評価なる記事がある。実はその前年に経済学部はすでに授業評価を実施している。

しかし、授業評価は方法に過ぎない。要はどのような学生を社会に送り出そうとしているのかだ。「建学の精神」も大きな理念としてはよい。「行学一如」もよい。しかし、あの大学ではこういうことが身につくという意味での目標がもう少し明確にされる必要がある。経済学部ではこれだ、といえることは決まっていない。私の考える目標は、「数字に強い」、あるいは「二つ以上の答えから結論を導く習慣」、といったものである。

経済学科昼間主コース主任 溝手 芳計教授

経済学部経済学科では、この間、前執行部のもとで、初年次教育をどうするかをめぐって議論してきました。諸説噴出でこれまでのところ、残念ながら、カリキュラムや運営体制といった制度的改革までは到達できていませんが、今年3月には「経済学概説」と「基礎ゼミ」について、担当者の他に有志の教員が加わって「経験交流会」が開かれました。個々の教員の授業改善努力とあわせて、学科や科目担当者といった集団レベルで課題意識を共有しながら、切磋琢磨していくことも大切ではないかと考えています。こうした営みももっと広がっていくことを期待しています。

経済学科夜間主コース主任 森田 佳宏教授

本学においても学生による授業評価アンケートが実施されていますが、教員が熱意をもって授業をすれば、多くの学生たちはついてくるという実感もっています。さて、個人的な状況になりますが、今年度は1時限目と2時限目に異なる講義を連続で担当しています。熱意をもって授業をするためには、自明のことではありますが事前に授業全体の構想を描

き、ポイントを明確にしておく必要があります。また、学問分野による違いはあるにせよ、制度等の変化が著しく、新聞や雑誌記事等で常に最新の動きを伝える必要がある授業では昨年度と同じ内容というわけにはいきません。アンケート項目にもあるように、授業時間は当然守らなければならない、10分間では研究室との往き来で精一杯で授業内容の検討までは不可能です。いわゆる良い授業をするためには、教員個人の努力もさることながら、これをサポートする全学的な体制が不可欠であると考えます。

商学科主任 堀 龍二教授

経済学部では毎年春に成績不振者面談会を開いている。成績不振の主要な原因の1つは、「授業が理解できない」「授業に興味をもてない」ことである。学生の側に勉学努力が求められるのはもちろんだが、教員の側にもレベルを落とすことなくわかりやすく興味を喚起するような授業内容と方法の工夫が求められているといえよう。大学としてのFDの課題は、そうした学生の努力や教員の工夫をサポートする体制・制度・環境づくりにあると考える。まず学生のニーズを把握し、それへの対応・改善策を講じ、それに対する学生からの反応を受けとって、また改善を試みるという取り組みを地道に繰り返していくことが、活気ある「学びの場」、「学生と教員が協力して知的生産を行う場」を実現させるであろう。

法学部

法学部長 浦田 早苗教授

総合情報センターには情報メディア係があり、著作権等に関わる環境が整ってきているので、全教員の授業のDVD録画及びコマネット配信を検討してもいいのではないのでしょうか。学部ごとに1ヶ月3-4回程度の授業配信であれば1年でかなりの数になりますし、DVDに録画したものは情報センター等での閲覧・貸出し等も可能かと思えます。他学部の先生の授業を拝見させて頂く事は教員同士の励みや刺激にも

繋がり、学内交流を進める一助になるでしょう。自分の授業を一視聴者として客観的に観ることによって得るものも大きく、FD推進においても効果が得られるのではと考えます。

法律学科昼間主コース主任 金子 昇平教授

FD (Faculty Development) について、大学審議会答申(「21世紀の大学像と今後の改革方策について - 競争的環境の中で個性が輝く大学 - 」平成10年10月)は、教員の教育内容、授業方法の改善を提言した。

上記答申を受けて、文部科学省は平成11年、大学設置基準の省令改正を行い、「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。」(大学設置基準第25条の2)という実定法上の根拠規定を設けた。

そこで、この規定の法解釈を試みることにより、FDの具体的項目に従い、その内容を明確にし、実施可能性を検討する必要がある。

法律学科夜間主コース主任 王 志安教授

法学部のFDに一言

10年以上の教育経験をもつ教員として、学生にとって最善の教育方法とはどういうものかについて依然確信をもっておらず、日々模索しているところである。教育方法の改善は、個々の教員による努力には大きな限界があるといえよう。そのため、法学部のFDについて積極的に取り組まれるべき課題の一つとして、How to teach に関して教員間の意見交換を定期的かつ組織的に行うことがまずあげられる。また、厳しく競争する現実社会を前にして、学業への取り組みにおける学生間の競争を支えるいかなる有効な仕組みをも持たないことは、深刻に憂慮されるべきである。年度別の成績優秀な学生に対する表彰制度が最低限のものとして望まれる。

政治学科主任 大山 礼子教授

学生による授業評価の実施に対して、駒澤の教員の反応は

まだ賛否両論といったところのようだ。学生の不真面目な回答を心配する声があり、学生にこびる講義が増えないかという危惧もある。しかし、学生をもっと信用してもいいのではないだろうか。私が一昨年まで勤務していた前任校は規模が小さいだけ小回りがきき、FDへの取り組みも早かった。駒澤よりも学力レベルの低い学生が多かったこともあって、授業評価がうまくいくかどうか懸念されたが、結果的には「学生は良く見ている」と感心させられた。評価が一人歩きするのは困るが、授業改善のヒントとして前向きに受け止めたいと思う。

経営学部

経営学部長 羽鳥 茂教授

教える立場と学ぶ立場のズレ

昨年度はじめて学生による授業評価が実施され、集計結果を見て、教える立場と学ぶ立場の意図と理解について思いがけないズレを感じ、まずは反省させられた次第です。学生諸君からのほめ言葉や評価に一喜一憂させられました。また、毎回資料を配布し、正確な知識を伝えているつもりでしたが、板書の希望が多いので、この二つを適切に組み合わせる必要性を感じました。授業の進め方については、内容に関する質問を繰り返しこちらの方で尋ね、理解を深めていくという教員サイドの努力がいかに重要であるかということを感じました。こうした発見を今後の授業に生かしていきたいと考えています。

経営学科昼間主コース主任 滝田 公一教授

もうかれこれ、20年以上前になるが、筆者がアメリカの大学院に在籍していた頃、アメリカの大学では、すでに学生による授業アンケートが行われていた。優れた研究業績がありながら、学生の評価の低い先生がいるかと思えば、それほど研究業績はないが学生の評価の高い先生がいたりして、人を評価するとは難しいものだと感じたものである。しかしなが

ら、当時の日本の大学院教育に比べると、総じてアメリカの大学院の授業では、難しい議論を噛み砕いてわかりやすくする工夫や、学生に授業に対する興味を持たせるための工夫などがなされており、これも、授業アンケートの効果なのかなと思ったものである。

経営学科夜間主コース主任 猿山 義広教授

新たなメディアの活用

昨年度、駒澤大学におけるFD活動は「学生による授業評価」を中心にして進められた。そこでわかったことは、教員が熱意をもって授業に臨んでいることと、その熱意が十分評価に反映されていないことであった。私見によれば、その理由はおそらくメディアの活用にある。学生のメディア環境は、この10年の間に劇的に変化した。一人一台のパソコンが当たり前になり、24時間最新の学術情報に接することも可能になっている。こうした時代の変化の中で、大学の授業も提供する情報を質・量ともに向上させていく必要がある。そのためには、教員はもっと教育上新たなメディアの活用に取り組むべきであろう。

医療健康科学部

医療健康科学部長 小山 正希教授

FDに思う

FDは総論の段階ではともかく、各論に入ると一気に難しくなるように思われます。確かに専門家集団であり、各教員の組織的なつながりが有機的であるとは言えない状況に在っては横断的な施策は困難であるのが現実でしょう。一方では各自の独立した努力のみではFDとは言えない側面もあります。しかし言うまでも無く授業こそが教員の最大事です。教育組織としての大学で行うFDは局地的ではあっても、やはり、個々の教員が担当する教室から授業改善の方法論として立ち上げるのが効果的であり、そこから拡大してゆくのが自然であるように考えます。組織的な支援体制が必要であり、

基本的要件となりましょう。

診療放射線技術科学科主任、短大放射線科主任

青木 清教授

FD活動について

昨年、FD活動の一環として学生による授業アンケートが実施された。授業アンケートのやり方や利用法に関しては、学会誌や新聞などでいろいろな意見が発表されている。論点の一つに学生の名前を書かせるかどうかがある。本学では無記名で行ったし、他大学でもそれが多いようである。これは、学生の自由な意見が聞けるという長所がある。一方、本年2月のFD研修会で講師の三尾忠男先生は、責任を持って書いてもらうため記名式にしているとおっしゃっていた。中間的に、記名式にして職員が回収し、教員には名前を除いた情報を提供するという意見もある。いろいろな考え方があり、将来に向けた研究課題であろう。

外国語部

外国語部長 野島 利彰教授

外国語授業の改革

アンケートで問うているように、語学科目についても学生に理解と満足を与える授業が望ましい。しかし現在の体制では理解できなくても、それは学生の責任でもまた教員の責任でもないように思える。異なった二人の教員が週一回ずつ、一時間半の授業を行なう現在の体制は、習ったことを忘れさせるためにあるように見える。語学は短時間でも毎日学ぶことで初めてその進歩と成果が現れる。新入年度の半期は導入教育と語学授業に集中し、語学ことに初習外国語は週4回ないし5回、60分授業の形で、それも出来るだけ一人の教員が担当する体制が望ましい。これは外国で語学講座を受講すれば当然のことである。

第一群主任 岸本 茂和教授

言霊のさきわう国の日本の、その国のことばの日本語に、外国語の“侵略”することいちじるしく、目にあまるものがあるといわれてひさしい。とうぜんのことながらそれらの語は、むかし人間にとっては理解のそとにあり、その理解力の欠如を、そのむかし人間は、天をあおいで慨嘆する。

Faculty Development の縮約形らしいFD という語はそのさいたる侵略者の代表で、どうやら津々浦々の大学構内を侵し、いまではすました顔をしてでんと居すわり、そこに棲息するものたちを翻弄し嘲笑しているようにさえみえる。たんに能力開発のお題目とうけとるだけではミモフタもないらしいのである。

FD を解くカギのことばは、急速に進行してきた少子化、それにとまなう大学進学人口の減少、大学進学率の高騰、大学の大衆化、などであろうか。FD は、これらの社会的現象に容易に対応しきれないでいる大学側の、だから、文化革命のようにわたくしにはおもわれる。

もはや旧態依然はゆるされぬ、意識を改革せよ、古い革ぶくるに新酒をみさせ、そしてなによりも、学生に充足感と達成感をあたえられるよう日々懈怠なく創意工夫せよ、などと鞭撻されるとしたら、そのときはさすがごと、片隅に、むかし人間は身をひそめるしかない。

第二群主任 佐藤 普美子教授**悪い講義**

ある大学の「授業担当必須マニュアル」に、悪い講義に共通する特徴として次の点が挙げられていた。授業の目的・目標や講義の主題について最初に紹介するのを怠る。学生との接触を欠く。専ら講義ノートばかりに注意を集中して、学生の表情や教室全体の雰囲気を見ない。抑揚も力点も無い一本調子の声で講義する。現在の講義内容が全体の中ではどういう関わりを持つか、より広範な学問分野との関わりはどうかについて何も言及しない。学生の知識や関心を無視し、学術専門語や曖昧な用語を多用する。… ([Eble1977]より) 学生だけではなく、教員自身による(自己)授業評価が必要だと思う。

保健体育部**保健体育部長 牧野 茂教授**

FDについて - 授業アンケートについて

10年程前より「授業評価アンケート」を個人的に実施してきた。集計結果は、実施の方法が悪かったのか学生の真意が十分に伝わってこない部分が多々あった。平成16年度に本学で実施したアンケート結果は、全学的な実施ということで総じて率直に回答または記述されていると感じた。

授業評価アンケートをより良いものにするためには、質問項目等の改良も必要でしょう。また、あらゆる機会を通じて趣旨等を学生に周知することも必要だと思います。学生の態度を変容させることでより信用性の高い結果が得られるはずであり、授業改善や開発が促進されるのではないのでしょうか。

保健体育主任 田中 佳孝教授

FD元年に思う

前任者から全学自己点検・評価委員を受け継ぎ、7年余りの間に“脚下照顧”の発刊、文部科学省の視察および大学評価、FD検討ワーキンググループの設置、FD推進委員会の設置、勉強会や研修会開催等々多くのことを身近で接し、学ぶことができました。そして昨年度我が大学でもFDの柱の1つである「学生による授業アンケート」が全学的に実施されました。教員から学生への一方通行的な事が多い大学教育の中で我々教員がより有効な教育を進める上で、彼らの意見や要望を知ることは新たな反省と進歩のきっかけとなる可能性を秘めていると思います。保健体育科目では多くの授業が実習であり学生へのフィードバックもより有効になされる事と考えます。以前から個人的やシーズンコースでの独自のアンケートは実施されていましたが、実習・理論の全域でのアンケート実施は大きな一歩となることでしょう。

数年前ニュージーランドの大学を訪れた時、教員研究室の全てのドアにはその教員の1週間の出講表が掲示してあり、その中に0.Hと書かれた時間が必ず2コマありました。見慣れないものであったので世話をして戴いた教授に質問すると

「オフィスアワー」とのことで、どの大学でも実施しており学生はアポを取り、様々な話の為にやってくるとのことでした。そのような制度の経験のない私としては愚問をしたことで顔が赤くなる思いとともに、学生との対話の機会が少ない日本の大学には、学生の為に是非必要なシステムであると痛感致しました。

FDは始まったばかりですが、立ち止まることなく次の一歩を計画して戴きたいと願っています。

短期大学

短期大学部長 岡本 誠教授

本学のFD活動は、現在のところ、「学生による授業アンケート」がもっぱら話題になっているように思われる。そこで、すでに10年ほどの経過を見た短大・英文科の立場から、実施上の具体的なことを一言申し上げたい。

学生にアンケート用紙を配布し終えたら、注意点を述べたあと、われわれは立ち去るようにしている。前のほうに座っている場合が多いが、いつも真面目な授業態度でいるような仲良し学生2名に全員のぶんを回収して、資料室まで持参するように頼むのである。これで事故が起こったことはない。担当の教師は教壇で待っていないほうがいいのである。

また、非常勤講師にもアンケートの結果はコメントを付記して郵送している。

国文科主任 坂口 博規教授

短大国文科のFD活動と今後の抱負

国文科では従来より卒業生に対する授業評価を含めた学生生活についてのアンケートを実施し、そのデータをキャンパス相談会での受験生相談等に利用したり、国文科のカリキュラム検討の材料にしてきている。1年次・2年次の選択必修科目である「演習」において、少人数による国語学・国文学の専門教育を充実させることや、より質が高く、且つ分かりやすい授業法を求めて、各授業時にその日の小レポー

トを実施する等、教員各自工夫に努めている。今後も授業スキルの改善を、学生が積極的に授業に取り組む姿勢を作り上げること、それによって学ぶことの喜びを得させることを目的として推し進めたい。

英文科主任 湯浅 陽子教授

短大英文科のFD活動10年を振り返って

短大英文科で平成7年度から独自にシラバスと授業評価をセットで導入して丸10年が経過した。専任&非常勤全教員の授業評価を半期ごとに実施し、プログラム作成に詳しいモエ教授の多大なボランティアの下、データ処理も全て内部で行い、数値データの結果を教員間で公表し、次のセメスターにその結果を反映させるよう努力した結果、教員同士の密かな競争心も功を奏して、この10年の間に全体的に授業の質が飛躍的に向上したと自負している。互いにある程度監視しあうことが無ければ、これほどの成果は上げられなかったのではないかと思う。あとは何と言っても個々の教員の向上心に依るところが大きい。

仏教科主任 木村 誠司教授

「学生による授業アンケート」がFDの一環として実施されたのは昨年であった。時代も変わったものだと思う。私が学生だった頃を振り返ると、当時の私とその種のアンケートに対して適格な判断が下せたのか、正直なところ、はなはだ疑問である。授業を充実させることに反対する者など誰もいないが、どのような授業がよい授業なのかを決めるのは、実は難しいことなのだ。そもそも、万人が受けたい授業など存在しないであろう。FDというローマ字表記に違和感を感じるとともに、この先、FDはどこに向かい、何を指すのか、という不安も覚えるのである。

駒澤大学FD推進委員会委員名簿

委員長	学長	大谷哲夫
副委員長	副学長	竹花光範
委員	仏教学部長	池田練太郎
	文学部長	高木正博
	経済学部長	小杉修二
	法学部長	浦田早苗
	経営学部長	羽鳥 茂
	医療健康科学部長	小山正希
	外国語部長	野島利彰
	保健体育部長	牧野 茂
	短期大学部長	岡本 誠
	仏教学部教授	吉津宜英
	文学部教授	小野浩一
	経済学部教授	光岡博美
	法学部助教授	高橋洋城
	経営学部教授	明石博行
	医療健康科学部助教授	西尾誠示
	外国語部助教授	岩崎 皇
保健体育部教授	村松 誠	
短期大学教授	高野秀夫	
教務部長	廣瀬良弘	
幹事	総合企画室長	水谷延久
	総合企画室企画課長	秋沢英策
	教務部学務課長	岩根嶺雄
	教務部教務課長	関 淳一

注1) 委員の任期は平成19年3月31日まで

注2) 印はFD推進委員会小委員会委員

駒澤大学FD推進委員会の今後の活動予定

平成17年度「学生による授業アンケート」

実施スケジュール

前期 平成17年7月1日(金)~7月7日(木)

後期 平成17年10月17日(月)~10月22日(土)

平成17年度 FD NEWSLETTER 発行予定日

第4号 平成17年10月20日

第5号 平成17年12月10日

第6号 平成18年3月31日

編集後記

FD NEWSLETTER 第3号をお届けします。今回は各学部等の学部長、学科主任の先生方にFD活動についての感想や意見を伺い、今後のFD活動に活かしていくという主旨で紙面を構成しました。予定したすべての先生方から原稿を頂きました。厚く御礼申し上げます。

さて、各先生方のFDに関する感想や意見は当然のことながら多種多様ですが、質の高い、また、学生にわかりやすい授業を行うために、さまざまな努力や工夫がなされていることを実感しました。現在のところ、駒澤大学のFD活動は始まったばかりであり、そのため教員の授業改善のためのスキル向上等の問題が中心的なテーマとなっています。しかし、今後は学生や職員に対するスタッフ・ディベロップメント(SD)も視野に入れた多面的な取り組みが必要となるでしょう。これらの諸点についても、各先生方の意見のなかでの確に指摘されている通りです。

また、同時に今後のFD活動は大学構成員のFDに対する異なった主張や意見を尊重していくことも重要です。画一的な方法や評価の仕方を押し付けるのではなく、駒澤大学の構成員の個性を生かせるような仕方、またそのようなFDの方法を模索していくことの大切さを痛感しています。

(吉津、光岡)

JUN.2005 FD NEWSLETTER 第3号

発行日：平成17年6月20日

発行者：駒澤大学FD推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

TEL 03-3418-9867 FAX 03-3418-9037

(事務局：総合企画室)